

口頭発表活動における学生同士の相互評価の役割

高橋 純子

要 旨

帰国子女の学部日本人学生と留学生による日本語演習2の授業では、大学生としふさわしい口頭表現能力とレポート作成技術を養成することを主たる目的として口頭発表、討論、ディベート、プロジェクトワークなどの活動を行ってきた。口頭発表というのは、不特定多数の聴衆を対象に、あるまとまった話をするもので、「国の紹介」「本/映画などの紹介」「エピソードを語る」「説明をする」「プロジェクトワークの発表」などそれぞれ異なる話し方を要求するものであった。発表者は聴衆であるクラスメートから自分の発表に対するコメントを受け取る。このような学生同士の相互評価は、学生の口頭発表に対する動機付けに貢献し、さらに、発表時の態度、聴衆の方を見て話す、間合いのおき方、発音・イントネーションに注意する、視覚資料を用いる、などの演出面においても効果をあげたことが観察された。しかし、個々の学生の発音、文法の間違いなど細かいところでは教師の積極的介入の余地がある。また学生のコメント文は、欠点を正面から攻撃するのではなく、改善への示唆という形をとり、全般的に相手を思いやる配慮が見られた。

【キーワード】 口頭表現 相互評価 動機付け 聴衆への配慮 発表者への配慮

Roles of Reciprocal Peer Evaluation in an Oral Competence Training Programme

Takahashi, Junko

This is a report of how reciprocal peer evaluation affected the development of both the Japanese returnee undergraduate students and foreign undergraduate students in an oral competence training programme.

The programme was based on the idea of 1) students' spontaneous participation 2) reciprocal learning between the students, and was designed to provide them with the basic skills of oral presentation and academic report writing so that they are ready for university life as freshmen.

Judging from the teacher's observation and the students' self evaluation at the end of each term, reciprocal peer evaluation for each speech enhanced students' motivation and made them more aware of the audience, which led the students to clearer presentations with the aid of visuals, paying attention to pauses, pronunciation, intonation, eyecontact, and speed of talking. This reciprocal peer evaluation improved the presentational aspects. However, the improvement of language skill of grammar and pronunciation, was not as clearly demonstrable as the skills of delivery. The more competent students seemed to welcome severer comments on their speech. Overall, going through three to five types of speech made students feel more confident when they speak in public. It is observed that the students used softened expressions in their comments. Few direct straightforward criticisms were found.

1. はじめに

筆者の担当する「日本語演習2」のクラスを受講者は、通常、外国人学部学生と帰国子女の日本人学生、主に1年生が登録する。外国人学生の多くは、言語レベルでは、日常生活に支障をきたすことは、あまりないような学生である。日本人学生の日本語力は、聞く、話すの技能においては、特に大きな問題はなく、日本語母語話者である。学部での授業は、学生によって異なり、英語での授業に出席し、英文の文献を読み、英文でレポートを提出する学生もいれば、授業も提出物も日本語で、と高度な日本語力が要求される学生、日本語と英語と両方が必要となる学生とまちまちである。また、日本語でのレポート提出やゼミでの発表が求められるわけではないが、せっかく日本に留学したのであるから、日本語でこれらの課題がこなせるようになりたいという意欲的な学生もいる。

母語話者としての日本人学生と、外国語として日本語を学んできた外国人学生が大学生としてこれから身につけておくべき共通の課題として、(1) 口頭表現能力の向上と(2) レポート、論文の形式と書き言葉を学ぶ、を2本の大きい柱として一年間の授業を組み立てた。そして、9月に大学一年生として入学する帰国学生には大学生としての自律的学習態度を身につけてもらいたいとの意図と、外国人学生と日本人学生との交流を活発にし、対話や共同作業、相互の批評を通して他者を理解し、自己を確立する助けとなる場を提供する、ということを目的に、(A) 自律的学習態度の育成、(B) 相互学習、を授業運営の基本姿勢とした。今回の授業報告では、課題(1)の口頭表現能力の向上を実現する活動のひとつとしてのスピーチとそれに伴う学生同士の相互評価の効果について報告する。

倉八(1995)は、第二言語学習場面に特有の『第二言語不安』に関する研究を紹介し、(1996)では、スピーチを経験させることによってスピーチの不安を除去することが何よりも肝要であると述べ、スピーチ経験を不安の除去につなげるためには、スピーチの後に情動的なフィードバックを与えることが、話者不安を軽減し、スピーチへの動機付けを高めること、特に、ディスカッションが動機付けに与える効果が大きいことを示した。

日本語母語話者である日本人学生には『第二言語不安』はあてはまらないが、人前で話す経験の乏しい学生にとって、ある程度改まった場でのスピーチは緊張するものであろう。母語話者であっても、公の場で話すのが苦手な学生もいる。本稿では、スピーチ指導の一つの方法として学生同士の相互評価がどのような効果をもたらしたか、授業観察と学期の最後の学生の自己評価から考察する。

2. 学生のスピーチにおける問題点

本授業では、「あらたまった場での口頭表現能力の養成」という目標をかけた、その具体的活動として、一人が大勢の前で話す、いわゆるスピーチ、そしてディベート討論会、プロジェクトワークの発表などを行った。外国語としてであれ、母国語としてであれ、日本語である程度まとまった考えを複数の聴衆に、主に音声を媒介として伝える口頭表現全般をここではスピーチと呼ぶ。

この意味において学生たちの抱えている問題点をいくつか挙げてみる、

(1) 伝えたいことの的を絞る。

- (2) 話しの構成に注意し、接続表現を効果的に用い、話しの流れを明示する。
- (3) 明瞭な発音、メリハリの効いたイントネーションで話す。
- (4) 文法の間違い、適切な表現、語彙の選択。
- (5) くだけた話し方とあらたまった話し方の使い分けをする。
- (6) 聞き手の立場を考慮する。

- 1) 相手にとって未知の情報か、既知の情報を考慮して説明を加える。
- 2) 同音異義語や漢字熟語の使用に注意を払う。
- 3) スピード、間の取り方、聴衆の反応を見る。
- 4) 言語だけの説明では明確に伝えられない場合、実物や写真、図、絵、グラフを示したり、板書をするなどの工夫をする。

(7) 堂々と自信をもって話す全体的な態度

など、それぞれ程度に差があるが、あまりできていないことが観察された。これらの問題点は、裏を返せばスピーチにおける一般的注意点でもある。

外国人学生と日本人学生では、問題の傾向にやや違いが見られた。日本人学生の問題点としては、(1)(2)(5)(6)が目立った。母国語であることからの甘え、安心感から準備不足、推敲の足りなさが見られた。外国人学生の場合は、(3)(4)(5)の外国語として日本語を操ることの困難点が顕著であった。両者に共通するものとして、(5)があった。両者ともスピーチレベルへの配慮が欠けているようであった。(3)の明瞭な発音、メリハリの効いたイントネーションは日本人学生においても、個人差があり、終始ぼそぼそと話す者も見られた。

3. 授業の方法

3.1 対象者

1997年、98年、99年の1学期、2学期、3学期に受講した全27名。学生によっては、1学期のみの受講、2学期と3学期の受講、1、2、3学期を通しての受講という3つの受講の仕方がある。2学期のみ、3学期のみという受講形態はない。27名というのは、この3つの受講形態を問わず、本授業を受講した延べ人数である。以下はその詳細である。

1997年度

【1学期】

外国人学生5名

マレーシア(男子1名 女子1名)

フィジー(男子1名)

中国(男子1名)

【2、3学期】

1学期の外国人学生5名

日本人学生3名(男子2名 女子1名)

ニュージーランド(男子1名) 日本人学生0名 計 5名(男子4名 女子1名)	計 8名(男子6名 女子2名)
--	-----------------

1998年 【1学期】 外国人学生3名 マレーシア(男子2名) 韓国(女子1名) 計 3名(男子2名 女子1名)	【2、3学期】 1学期のマレーシア男子学生2名 日本人男子学生1名 計 3名(男子)
--	--

1999年 【1学期】 外国人学生 日系カナダ人(女子1名) 日系アルゼンチン人(女子1名) ベトナム(女子1名) 中国人(男子1名 *女子2名) ニュージーランド(男子1名) *ハンガリー(女子1名) *韓国(女子1名) 日本人学生3名(男子3名) (うち2名は1学期のみの受講) 計 12名(男子5名 女子7名)	【2、3学期】 1学期の外国人学生5名 モロッコ(男子1名) 韓国(女子1名) 1学期から継続の日本人男子学生1名 日本人女子学生1名 計 9名(男子4名 女子5名)
---	--

(注) *の学生は1学期のみ受講

3.2 活動内容

本授業の1年間を通しての学習目標は1で述べたように、大学生としての基本的口頭表現能力を養成することと、レポート、論文の書き方の基礎を学ぶことである。

その実現のため、以下のような活動を行った。その学習目的と話者一人当たりの所要時間を記す。尚、1コマは、75分である。

(1) 紹介

1) 本・映画の紹介

目的：本映画の紹介：著者、出版社、本のサイズ、出版年月日などの事実の提示。

粗筋、内容を伝えることによって、要点整理することを学ぶ。

作品についての一般的評価などの引用ができるようになる。

さらに自分なりの感想、評価が言える。

所要時間：本・映画の紹介： 7～10分程度 5～10分ほどの質疑応答

1回の授業で、3～4名ぐらいの発表。

2) 国の紹介（日本人帰国生は在住経験のある国について）

目的：その国についての地理的、歴史的、文化的、政治的、経済的概要を提示する。

その後、的を絞って特徴的なこと、知ってもらいたいことについて話す。

所要時間：15分程度 10～15分位の質疑応答

豊富な資料を準備し、それを消化するのに時間がかかった。

1回の授業で、2名ぐらいの発表。

(2) エピソードを語る（それぞれの心に残る体験・経験）

目的：体験したことを順序立て相手に伝え、聴衆に問いかけたりしながら、聴衆を話しに巻き込み、共感を呼ぶ話し方、話しの構成を考える。

聴衆とのコミュニケーションを取りながら話しを進めていくことを学ぶ。

所要時間：10分以内。質疑応答10分を目安としたが、それを越えることもしばしばあった。

1回の授業で2～3名ぐらいの発表。

(3) 討論会

目的：賛成、反対の積極的あるいは消極的表明の仕方、相手の意見や論点を確認する、条件付き譲歩の仕方などを学ぶ。司会者として、討論の進め方、まとめ方、いろいろな観点からの意見の引きだし方を学ぶ。

所要時間：40～45分 討論会の後、感想など、話し合い。

(4) ディベート

目的：ディベートの形式、方法、規則を学び、それにのっとて論理を展開していくことを体験してみる。

チームとして論理を組み立て、立論の形で提示することを学ぶ。

自説を補強、証明するための資料を集め、その効果的提示ができるようになる。

所要時間：ディベート本体は30分～40分程度 引き続き審判からのコメントなど。

(5) 視覚資料を効果的に使うトピックを探して発表する

目的：視覚資料の効果的提示方法を考える。

特に実物投影機のOHPの機能を使い、資料提示のし方に慣れる。

視覚資料の本来の用い方は、言いたいことが先にあり、それを補強するものとして使われるものであるが、本授業では、特に「OHPの使い方に慣れる」という目的でOHPの特性を生かした使い方を考え、それに合わせてトピックを選び、発表をすることとした。

所要時間：10分以内。1回の授業で3～4名。

(6) 説明をする

目的：聴衆にとって未知の情報をわかりやすくする工夫を考え、説明する。

視覚資料などが上手に活用できるか、分かりやすい比喻、例えが使えているか、などを聴衆として評価する。

所要時間：10～15分。質疑応答の時間が15～20分。1回の授業で2～3名。

(7) プロジェクトワーク

97年度は、1年を通して受講する学生は2回。それ以降、98、99年度は1回。

1学期のみ受講する学生及び2、3学期受講の学生もその学期内に1回提出とした。

目的：1)あるテーマを決め、アンケートを作り、データを収集し、分析し、考察し、結論を出す、という基本的手順を学び、体得する。

2)得られたデータの提示の仕方を学ぶ。

3)論文形式でレポートを提出。章立ての仕方や書き言葉を学ぶ。

4)発表をする。

所要時間：15～20分。質疑応答10～15分。1回の発表者2名。

本稿では、このうちの(1)(2)(5)(6)(7)の発表について報告する。

3.3 学生同士の評価

各発表、活動の後では質疑応答の時間を設けた。学生は、発表を聞きながら、B5用紙の半分くらいの用紙に自由記述で評価、感想を書いていった。評価項目は下記の通りである。なお、この評価項目については、授業で説明をした。評価用紙には、これらの項目は記載されておらず、板書で示した。聴衆である学生は、これら全ての項目について評価・記述する必要はなく、特に気がついたことを書き出し、教師がそれらを項目ごとに並びかえまとめた。また、発表者は自己評価と感想、を後日提出した。この発表者の自己評価と感想、聴衆の学生評価に教師の評価、感想を加えフィードバックシートを作成し(資料参照)、翌週の授業の始めにクラス全体で話合いの時間を設けた。

【評価項目】

1) テーマ

2) 構成(まず、次に、最後に、などの表現の使用の有無も含む)

3) 内容

4) 話し方(姿勢、目線、速さ、声の調子、間合い)

5) 音声(発音、アクセント、イントネーション)

6) 文法・語彙・表現

7) 興味を引くための工夫(視覚資料の提示など)

8) 全体的印象

9) その他気がついたこと

4. 学生のコメント

以下、学生のコメント例で多くよせられたものを挙げる。学生の評価用紙には記名してもしなくてもいいこととした。ほとんど全て匿名であった。

【肯定的コメント】	【否定的コメント】
声が大きい	声が小さい
聴衆の目を見て話している	聴衆を見ていない
間をうまく取っている	原稿を読んでいる
聴衆とのコミュニケーションがある (例 質問を投げかけるなど)	話すのが速い
資料の提示が適切	詳しすぎる、専門的すぎる
準備がよくしてある	資料がない、もしくは小さくて見にくい
落ち着いて話していた	準備不足
あらたまった話し方	少しドキドキしていたようだった
	くだけた話し方

スピーチの形式、マナーに関するコメントがほとんど毎回見られた。スピーチの内容に関するものは「知らなかった。たいへん勉強になった」「おもしろい」「よく調べてある」「体験を話したのがよかった」「私も行ってみたいくなりました」などが多く見られ、その他、紹介された事柄についての感想などが書かれている。

毎回、どの学生も問題にするのが、聴衆を見ているか否かであった。学生にとって原稿を読まず、聴衆をよく見て、はっきりと大きい声で話すスピーチがよいスピーチの第一条件のようであった。

「～つた(とやった)」や「めっちゃ(とても)」などの口語表現は、避けるべきものとして指摘されていた。日本人学生が使った「お祈りをしないと寝れない的になってきちゃって」などの表現になると、外国人学生では、指摘するのが困難で、教師のコメントが必要であった。

学生が評価を書く際、直接的な表現をさげ、相手を配慮した表現の使用が見られた。複雑な人間関係と歴史背景を説明した、漢字熟語が多く、難解なスピーチに対して、以下のような評価が寄せられた。

- 評価1 とても詳しく調べていてよかったが、詳しすぎて理解するのに苦労した。
- 評価2 難しかったけど、一生懸命私たちにわかりやすく説明しようとしている気持が伝わります。
- 評価3 説明が詳しかった。(以上原文のまま)

5. 学期末の学生の自己評価

各学期の最後に、各課題に対する取り組み、その成果について自由記述で自己評価を課している。これらのデータから 1) 学生同士の相互評価をどのように受けとめているのか 2) 学生同士の評価は正の動機付けとして働くのか、負に働くのか 3) 口頭表現に対する認識の変化、を探ってみたい。1)については、「学生からの評価をどのように受け止めたか」という質問を自己評価項目に入れた。その代表的回答を紹介する。(以下原文のまま)

- 回答 1 かなり当たっていたので、反省しなければならないと思っている。
- 回答 2 ちょうどベトナムのお正月だったので、おせち料理の作り方と食べ方を説明した。皆にとってはつまらないテーマなのかと発表する前、少し心配した。かなり興味を示してくれたようで良かった。皆、いつも本気で評価を書いてくれることに感謝している。
- 回答 3 「しゃべりがはやすぎ」というコメントがあったが、認めます。本来、早口の上、緊張してしまい、とんでもないスピードになってしまった。公の場で発表する時のあがり症は、結局、克服できませんでした。
- 回答 4 専門的な話はあまりなかったのに、わかりにくいとコメントした人がいて残念だ。その学生が文科系であっても、もう少し科学についての知識や関心を持ってほしい。「よく準備した。視覚資料を上手に使った」と楽天的にコメントした人もいたのでうれしい。
- 回答 5 発表する前に、何を言うか決めていたが、実際に話しをしたら、言いたいことがきれいに伝わらなかったり、大事なことを言うのを忘れたりした。そして、発表している時、内容が浅いと思っていた。それで、うるさいコメントを予想していた。でも、結局、皆がよいことを書いてくれて興味をもってくれたみたいだからうれしかった。
- 回答 6 テーマがよいと言われてすごうれしかった。でも、抽象的で、大きいテーマなので、もう少し、自分が何を伝えたいのか明確にすべきだと感じた。
- 回答 7 納得のいくものが多かった。他学生や先生から評価をもらえるのはうれしい(という役に立つ)と思った。しかし、みんな優しい評価をくれるのもっと辛口の評価がもらいたかった。(辛すぎても悲しいですが)
- 回答 8 鋭いことをたくさん言われたので、どっきりした。参考になった。「話すのが速い」とは普段、人と話していてもよく言われることで、気をつけたつもりだったけど、やっぱり緊張したのと少し焦ったせいで速くなってしまったみたいで、これから気をつけたい。
- 回答 9 資料やグラフは、面白かったと思うが、発表は、そんなによくなかったと思う。他学生が面白いと言って、寛大だった。
- 回答 10 自分の発表の弱点を自分でも感じていたから、書かれたコメントは予想通りだった。しかし、僕のアンケートを使って、アンケートの作り方について皆で考えた時、だんだんうるさいなと思うようになった。

1)について学生は他学生の評価を妥当なものとして受け容れているようだ。反発したり、不当だとは考えていない。寛大だと感じている。また、学生は他学生からの評価によって励まされていることがうかがえる。学生は、自分の発表の欠点については、他学生の指摘がなくても十分自覚している様子である。少なくとも、気が付いていると思っている。そして、スピーチがうまくいかなかったがっかりした時は、他学生が興味を示してくれたり、何か褒めてくれることで随分救われているようだ。教師だけのフィードバックでは、どうしても間違いの指摘に重点がおかれてしまいがちだ。学生同士の評価は、自分のスピーチの弱点に気が付いている学生が、スピーチ後に落ち込んでしまうかもしれない状況を避ける、あるいは抜け出すのに多いに役立っていると言える。2)の動機付けに関しては正の方向に作用したと言えるのではないかと。3)については、主に日本人学生からのコメントに表れていた。母語話者であるという安心感からか、話の構成、演出などに注意を払わず臨んだ結果、いざ話してみるとうまくいかなかった、という経験をしたようだ。

6. 発表者の発表後の反省と感想

発表者自身のスピーチに対する反省及び感想をいくつか紹介する。(以下原文のまま)

- 反省1 皆がもっと関心のあるテーマを選べば良かった。
誰も、別に「チョコレートって、どうやって作られるのだろう」と思っていたとは、思えない。
- 反省2 各ステップを図、または絵で説明したほうがわかりやすかっただろう。
- 反省3 「第1に」、「次に」、「そして」など接続表現をより頻繁に使ったほうが、各段階が明確であっただろう。
- 反省4 テーマが少し難しすぎた気がする。もっと説明しやすいものを選べばよかったかもしれない。
- 反省5 もっと、図など事前に用意すれば、もう少し分かりやすく説明できたかもしれないと思った。また自分自身、ゲノムについてパーフェクトに知っているわけではないので、もっと勉強しておけば良かった。例を出すのは絶対有効だと思った。車の例はなかなか良かったかもしれない。テレビなどを見て参考にするつもりが、ちょうど良いものが見つからなかった。今度は是非そうしたい。(次があれば)
- 反省6 「説明」よりも「紹介」をしてしまった。適当にやっちゃい反省している。
- 反省7 緊張してしまって、自分が何を言おうとしていたのかも覚えていない。練習を1回だけでなく、何回もするべきだった、反省。
- 反省8 最後の方になってからあせてやったので、もっと早くに準備すれば良かった。中間発表をもう少し丁寧にやればよかった。時間が足りなくなってしまったので反省。
- 反省9 簡単に説明しようと思ったが、どうしても太陽光発電の原理がわかりにくかったと思う。皆が理解できるように専門的な話しを避けようとした。テーマを選ぶ時にちょっと迷ったが、終に太陽発電に決定した。
- 反省10 テーマを見つけるのに時間がかかった。写真を用意しなかったので、少し理解しにくかっただろう。やはり、前日、1回ぐらい練習した方が、発表する時、もっときれいな日本語が使えると思った。発表する時自分が話した日本語は、今、覚えていない。たぶん間違いだらけの日本語だった。ベトナムのチマキについて、皆から質問や興味を示してもらったので少しうれしい。
- 反省11 テーマに関心を持っていたので、インターネットや図書館で見つけた資料を文科系にも理解できるように簡単にした。もう少し時間があれば、もっと面白いデータを見せられたと思う。
- 反省12 最初、何について説明するかとても迷ったが、とりあえず自分の専攻の文化人類学に関することにしようと思い「文化とは何か」ということでやったが、やはり準備する時間もあまりなかったこともあって、聞いている人にとっては、あまりわかりやすいものではなかったはずだ。もう少し事前にいろいろと資料を集めておけばよかったと思う。

発表者の反省は次の2点に絞られる。

- 1) テーマの選択が適当であったか。
 - 2) 事前の練習や資料を集めるなどの準備が十分ではなかった。
- 学生が他の学生の発表に対して寄せた評価、つまり、実際の発表場面での話し方、アイコンタクト、声の大きさなどについてはほとんど記述がない。これは、発表したばかりで反省7にあるように「自分が何をどのように話したのかあまり覚えていない」ということもある。発表場面での自分の態度よりは、むしろ、より大きな枠組みである、テーマの選択、資料の準備というところに目が向けられているようだ。

7. まとめと今後の課題

以上、観察されたことをまとめると、1) 学生は他学生からもらう評価を肯定的に受け容れている。その評価はあまり厳しいものだとは感じていないようである。2) 聴衆の存在を意識し、興味を引きそうなテーマを選ぼうとしたり、より分かりやすい発表に取り組もうとする動機付けになっている。3) 自分自身の行ったスピーチについては、失敗した点など意識しており、その時に何か肯定的なコメントをもらうことによって精神的に助けられていることが伺える。4) あまり出来のよくなかったスピーチに対しては、学生は、相手を配慮した表現を用い、批判を緩和しようとしている。

この口頭表現能力養成を目指したプログラムを組んでみて、発表活動後のフィードバックをどのように与えるか、というのが大きな問題であった。発表する学生たちだけではなく、発表を聞く学生も積極的に参加させたいということも考えた。

そして、このような形態にたどりついたのであるが、もう一つの疑問はフィードバックはいつ与えるかであった。98年、日本語教育方法研究会でポスター発表をした際、参加者の方から、フィードバックは、発表後すぐの方が効果的ではないか、とのご指摘をいただいた。確かに1週間後では、発表者の記憶も薄れ、指摘されたことが心に響かないかもしれないと懸念された。しかし、発表者自身の反省や感想の視点が、発表時の態度、発音、イントネーション、アイコンタクトなど細かいところにはなく、テーマの選択、資料集めなど事前の準備不足に向けられているとすれば、やや冷静になった頃、そのような細かい指摘があってもいいのではないだろうかと考え始めた。そして、発表に続く質疑応答の時に、聴衆の学生が興味を示し、いろいろな質問や感想を言ってくれるのを聞くことが発表者の動機付けに多に貢献しているようだ。とすれば、発音や文法、語彙、話す態度などは一週間後のフィードバックでもよさそうである。また、学生同士の評価について「発音の誤りをどう指摘すればいいのかわからなかった」という学生がいた。確かに、発音の矯正、助詞を始めとする文法の指摘などはビデオや音声テープにとっておいたものを聞かせるなどして、フィードバックをしたほうが効果がありそうだ。

では、学生たちの「準備不足だった」という反省点をどのように解決するのか、が当面の問題になる。現在の形式では、学生が個人で準備し、発表し、フィードバックをもらい、次の発表へと進んで行く。その度に「準備が足りなかった」「もっと資料を集めておけば良かった」という反省で終わってしまうのでは情けない。そこで、2～3名のグループを作り、そのグループで発表の準備をさせるという方法が考えられる。一人の発表に他の学生が責任を持つことになる。このようにすれば、本発表の前に何回か声を出して練習する時間も必要になる。資料の準備も「このようなグラフを示せばわかりやすいだろう」など、いいアドバイスがもらえ、実行に移さざるを得なくなるだろう。ディベートのようなチームプレーが必要になる場面では、今までもグループでの時間を設けてきたが、それをさらに個人のスピーチに発展させることができるかもしれない。学生の人数など条件が合えば、試みたいと考える。

筆者は、学習者同士がどのように学ぶのかについて興味を持ち、学生の学び合う可能性とそれを引

き出す工夫を探っている。相互学習が成功する条件としては、様々な要素が考えられる。学生の適性、教師の適性、目的意識の有無、自律的学習を助ける環境、雰囲気作りなどがある。授業の最適化を計るために、丁寧に事例を記述し、積み上げて行くことが肝要だ。この報告はその一つである。

参考文献

1. 池田玲子(1999)「ピア・レスポンスが可能にすること 中級学習者の場合」『世界の日本語教育』9 国際交流基金
2. Kelly, Lynne & Arden K. Watson (1986) *Speaking with Confidence and Skill*. Harper & Row Publishers.
3. 倉八順子(1993)「効果的なスピーチ指導へ向けての調査的研究」『日本語と日本語教育』22, 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
4. _____(1994)「スピーチ指導及びスピーチについてのフィードバックがスピーチ技術と学習意欲に及ぼす効果」『日本語と日本語教育』23, 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
5. _____(1995)「不安と第二言語習得」『明治大学人文科学研究所紀要』37
6. _____(1996)「スピーチ指導におけるフィードバックが情意面に及ぼす効果」『日本語教育』89号
7. 小池生夫監修(1994)『第二言語習得に基づく最新の英語教育』大修館書店
8. 産能短期大学日本語教育研究室編(1990)『大学生のための日本語』産能大学出版部
9. 高橋純子(1998)「あらたまった場での口頭表現能力を目的とする教室活動」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 5 No. 1
10. 東海大学留学生教育センター(1995)『日本語 口頭発表と討論の技術』東海大学出版会
11. 中道真木男(1997)「伝達行動の学習と自己の意識化」『日本語学』vol.16 8月号 明治書院
12. 能波由佳(1997)「口頭発表の考察と指導」『日本語学』vol.16 8月号 明治書院
13. 文野峰子(1997)「視覚情報の活用」『日本語学』vol.16 8月号 明治書院
14. 森本多喜子(1994)「The Effects of a Reading Strategy and Reciprocal Peer Tutoring in Intermediate Japanese Reading Comprehension」『世界の日本語教育』4 国際交流基金
15. 山下早代子(1997)「教室活動のあり方」『日本語学』vol.16 8月号 明治書院
16. 山田しげみ(1996)「日本語能力を伸ばすための要約指導」『日本語教育』89号

学生A(ベトナム)

発音：良い。

声が大きくて、話し方がとてもはっきりとしていて分かりやすかった。

声が大きくてよくよく聞えます。

発音がところどころ間違っていましたけど、意味は伝わりました。

日本語の発音はとてもきれい。

日本語の発音はきはきして聞いてとりやすい。

日本語を上手に使って説明していましたが、くせがあり過ぎるように感じました。

長音でない時に長音を使っていました。 例：首都 シュート

雨期 ウーキ

文法：ベトナムはどこにありますか。ベトナムはどこにあるのでしょうか。

少しドキドキしていたみたいだが、文法的に日本語がわかりやすかった。

構成：もうちょっと時間の分け方を考えれば、もっとベトナムのことを紹介できたと思う。

全体：色々な話が聞けて面白かった。

元気がよい。

自分の国をほこりに思っていることがとてもよく伝わってきました。

わかりやすい説明。

説明が詳しくてよかった。旗の話が面白かった。しかし、少しあせっていたせいで、たまに理解しにくいこともあった。ベトナムに行きたい！

風俗を紹介していただいて面白かったです。

視聴覚資料の使い方：地理を始め、季節、民族衣装など色々な面で、写真・地図・実物を利用して紹介し、とてもよかったと思います。

カレンダーを使って、ベトナムの国の特別な季節、数え方は初めてで、面白かったです。

ベトナムの女性の服装「アオザイ」は、絵葉書を使って色や種類などを紹介して鮮明、面白く紹介できました。

資料をたくさん準備して視覚的効果を高めたとする。

地図や写真や実物などの資料を利用して分かりやすい紹介だと思えます。ベトナムについて地理から季節と民族衣装と観光地かで、大体わかりました。面白くて、観光したくなりました。

助言：話を一つのテーマに集中した方がもっと深く理解できたと思う。

文化面で、服装しかなかったのがちょっと足りないように思いました。食生活や人々の普通の生活についてももっと知りたかったので、そういう面にももう少し力を入れるとよかったと思います。

内容的は、もっと的を絞って簡潔に短時間で紹介した方がいいと思います。

発表する時、目があまり動かない方がいいと思います。

ハンドアウトを準備したらもっと分かりやすい発表になったと思う。

「あの」が多かった。

印は高橋

説明する(コメント)

学生B：「チョコレート」

カカオの実物は持ってこれなかったかもしれないが、何か写真とかでもあったらわかりやすかったのでは？

ホワイトチョコはチョコレートじゃないんだ。ちょっとショック。聞いている間、チョコレートが食べたくなくなった。おいしそうな発表だった。

人はなぜチョコが好きなのかわかりません。別に嫌いではないけど。

絵があればもっとよかったと思う。

面白いテーマだったが、資料がなかった。

図を描いてくれたらもっと分かったと思う。

本人の反省と感想：各ステップを図、または絵で説明した方がわかりやすかっただろう。

「第一に……」「次に……」「そして……」など接続語をより頻繁に使った方が各段階が明確であっただろう。

(自分も含めて)みんながもっと関心のあるテーマを選べばよかった。

別に誰も「チョコレートってどうやってつくられるのだろう」と思っていたとは思えない。